

現代仏語の《encore》に関する覚え書

青木三郎

はじめに¹⁾

例えば *Trésor de la Langue Française (T. L. F.)* では *encore* を、I. adverbe de temps (時の副詞)、II. adverbe de gradation quantitative ou intensive (量的或は強度の漸進を表わす副詞)、III. cheville logique d'un raisonnement (à colloration affective ou exclam. et gén. fam.) de résignation ou de concession limitée (諦め或は制限された譲歩を説明する際に(この場合、情的または感嘆の色あいがあり、一般的にくだけた言い方である)用いる論理的なつなぎ)に分けている。他の仏語辞典を調べても概ね同様の分類がなされている。F. NEF (1981) では、要領よく、emploi temporel (時間的用法)、emploi quantitatif (数量的用法)、emploi pragmatique (語用論的用法)と名付けられている。この時間的用法は、sens duratif (持続)の場合、

[1] Comment! Vous travaillez *encore* à cette heure-ci?

(*Dictionnaire du français langue étrangère N2* より借用)

何だって。君はこんな時間にまだ勉強しているのかい。

と、sens itératif (反復)の場合、

[2] Vous êtes *encore* en retard, mademoiselle Berthier.

また遅刻ね、ベルチエさん。

に分けられる。

また、数量的用法には、

[3] (...) elle allait repartir l'instant d'après, errer *encore*, cueillir quelque autre passant, l'oublier, et goûter seulement, jusqu'à l'heure de se sentir lasse (...)

(Colette, *la femme cachée*, p. 16)

彼女は次の瞬間には再び立ち去り、更にさまよい歩き、誰か別の通りがかりの男を摘みとり、捨て去り、そしてただ味わい、そしてそんなことを疲れるまでくりかえすのだった。

- [4] Elle participe, de son fauteuil, à la vie littéraire et écrit *encore* deux ouvrages. (Colette, *la femme cachée*, p. 8)

彼女(コレット)は、ひじ掛け椅子にすわりながらも作家生活を続け、更に二つの作品を書いた。

などが挙げられる。語用論的用法として、F. NEF は、

- [5] 《Le seul savant, c'est *encore* Moïse》(Verlaine)

唯一の知者、それはやはりモーゼである。

の例を挙げているが、その他、T. L. F. が《cheville logique》と規定する用例の中には、

- [6] Tout ceci est terrible; *encore* ne sait-on pas tout.

これらはみなおそろしいことだ。とは言え、すべてを知っているわけではない。

- [7] Il nous met tous en retard et, *encore* c'est lui qui proteste.

彼のせいで僕らはみんな遅れたんだぜ。それなのに、その彼が文句を言っている。

- [8] Il y a eu une petite augmentation de salaire, et *encore*, cela n'a pas été sans mal.

確かに給料は少し上がったさ。そうは言っても、それだって苦勞がなかったわけじゃないんだ。

- [9] *Encore* que le froid fût très vif, il sortait de très bonne heure pour une promenade dans la campagne.

寒さがひじょうに厳しくても、彼は朝早く起き、田園を散歩したものだ。

- [10] Si *encore* j'avais eu le temps!

せめて時間があったならなあ。

- [11] Si *encore* j'avais son numéro de téléphone, je pourrais le prévenir.

もしせめて彼の電話番号を知ってたら、前もって知らせることが出来るのになあ。

のような例が見られる(ただし用例は、T. L. F. ではなく、[6]—[10]を *Dictionnaire de français 3500 mots* (1986) から、及び例 [11]を *Dictionnaire Bordas Pièges et difficultés de la langue française* (1981) から採った。)

本稿の目的は、これらの *encore* の用法を検討し、*encore* に特有の機能と、

encore の関わる文脈の特質を明らかにすることにある。

ところで、従来の研究、即ち、C. MULLER (1975), R. MARTIN (1978), J. HÉPELMAN & C. ROHRER (1978), 及び C. VET (1980) では déjà との対比により、encore の「時間的用法」のみが扱われている。分析概念として「前提」, 「可能世界」そして monde d'attente 等が援用されるが、F. NEF (ibid.) は、これら「時間的用法」のみに限った分析を批判し、モンタギュ文法を理論的支柱として、encore の三用法の統一的扱いを試みる。彼によれば、encore はどの用法においても「含意の形式的シェマ」(schéma formel d'implicature) を有するのであるが、つまり、encoreX と置いた場合、X が時間的であろうと量的であろうと、

$$\text{EncoreX} \rightarrow \exists X' < X, \dots X' \dots$$

(encoreX はその X よりも以前 (または以下) の X' の存在を含意する)

というシェマが一定に存在すると考えている。

A. BORILLO (1984) もまた、F. NEF と同様、従来の研究を批判し、多様な用法に共通する encore の「基本的意味」*sémantisme de base* (p. 38) を問題にする。彼女の仮説は、encore は基本的に ajout de quantité (量的付加) を表わすというものである。

この両者のどちらの仮説がより言語事実に即したもののなのかは、注意深い検討なしには断定できない。以下、我々の encore 分析の途中で再検討することになるであろう。

1. 時間的用法

まず encore の時間的用法から見てゆくことにする。この用法で検討すべき問題点は、

- (I) sens duratif と sens itératif の区別を決定する要因は何であるのか、
- (II) 論理的な「前提」構造は通常 encore の sens duratif において最も議論されるのであるが、そのような構造は sens itératif にも認められるのであろうか、

という二点が主となる。

1.1 sens duratif

上に挙げた例 [1] について考えよう。例 [1] が「まだ勉強を続けている」

と解釈されるためには、二つのことが保証されていなければならないと思われる。一つは、動詞の表わす事行 (procès) が、それ自体、運動量 (動作量) を有していること、そして、もう一つは、今問題となっている〈toi-travailler〉という事態とそれ以前に問題となる〈toi-travailler〉の間に、区切れないこと、即ち、同質の一回の事態が問題になっていることである。前者が語彙的アスペクトと関わり、後者がテンスと関わることは言うまでもない。では、*encore* は語彙的アスペクトのレベル (つまり概念レベル) で機能する副詞なのであろうか。或はテンスのレベル (つまり発話レベル) で機能するのであろうか。例 [1] において、〈toi-travailler〉が一回の事柄であることは、現在形をとりまく文脈により表わされている。言い換えれば *encore* の機能する領域は、文脈により用意されているのである。*encore* が加わることにより、文法的情報量が増すわけだが、例えば、C. VET は、

《*encore* indique que la situation énoncée par la phrase est la continuation d'une situation présupposée, continuation à laquelle on ne s'attendait pas.》(op. cit., p. 152)

encore は文によって表わされた状況が、その前提となる状況の連続であることを表わす。しかしその状況の連続については期待されていないのである。

と説明している。この考え方に即すると、例 [1] は過去 (以前) において「君は勉強している」という状況があり、それに対し話者が、「今は勉強していることはない」という期待、予想をたてる。しかしその期待、予想に反して、実際には、「君は勉強しつづけている」ということになる。この解釈から *encore* には二つのムーブメントが存在すると考えられはしないであろうか。つまり、(語彙的アスペクトはひとまず考慮外におき) 事態を P で表わすと、*encore* P は次のことを表わしているのである。一つは、P が基準時点以前において成立しており、もう一つは、今度は以前において成立した P を基にして、基準時点における P のあり方を規定するのである。この事情を図で示せば、次のようになる。

	Tj: 基準時点
Ti \frown Tj	Ti: 基準時点以前の事態成立時点
	Pj: 基準時点における事態
Pi \smile Pj	Pi: 基準時点以前の事態

例 [1] では、事態 Pi と Pj は実は同質的なものである。しかし、C. VET

のコメントが示しているように、encore の導入は、「期待、予想に反して」という意味価値を付与する。これは、我々の理解では、Pi を基にして Pj のあり方を規定する際に生じるものであると考える。つまり、Pi= \langle toi-travailler \rangle という事態に対し、同一の事態は、Tj では、Pj= \langle toi~ne plus travailler \rangle と一度規定されるのである。 \langle toi~ne plus travailler \rangle という規定は、 \langle toi-travailler \rangle に対しては、同質的な扱いではない。しかし、結果的には、同質的に扱い、一回の事態が持続していると扱えられるのである。このように考えると、encore の機能が多少明らかになってくるように思われる。encore は、Pi と Pj がもともとは異なったもの (Pi \neq Pj) であるという認識から出発し、結果的に同質的なもの (Pi=Pj) と扱えなおす機能をもつ²⁾。ただし、事態成立は Ti と Tj という二つの時点で認められるので、その間には時間的秩序、つまりオリエンテーションが存在することは否めない。従って、 \langle toi-travailler \rangle に対して、異質な領域は \langle toi-ne plus travailler \rangle のように時間的、アスペクト的な性格をもつ。

ここまでの論をまとめる意味で、図示しておく。

例 [1] の発話構造 : Tu travailles *encore* à cette heure-ci.

(1)	Ti	<	Tj (=To)
			To=発話時点
(2)	Pi= \langle toi-travailler \rangle		
(3)	Pi	\neq	Pj= \langle toi-ne plus travailler \rangle → ne plus P
(4)	Pi	=	Pj= \langle toi-travailler \rangle

さて、窮極的には同一の事態として扱えられる sens duratif の場合、encore はその事態の内部に ne~plus で表わせるような異質なゾーンを構築する。従って、sens duratif の解釈をうける事行 (procès) は、その内部に、「状態変化」changement d'état を導入しうるものでなくてはならないであろう。例えば、次の例を見よう。

[12] Est-il *encore* vivant?

彼はまだ生きているの?

[13] Il fait *encore* chaud.

まだ暑いですね。

[14] *Il est encore vieux.

*まだ年をとっている。

[15] *Il est encore tard.

*まだ遅いです。

例 [12] [13] では、事態は時間的方向づけが備わっており、être vivant → ne plus être vivant=être mort, faire chaud → ne plus faire chaud (= faire froid (frais)) の「状態変化」が想定できる。それに対し、例 [14] [15] の非文性は、être vieux, être tard が時間的に「状態変化」を想定することの困難さに由来していると思われる。R. MARTIN は、例 [14] の非文性について、

Dire que *Pierre était encore là à 8h.*, c'est présupposer qu'il était là avant 8 heures (+*Pierre était encore là, mais il n'était pas là quelques instants auparavant*). Ce présupposé est en effet maintenu dans *Pierre n'était plus là à 8h.*

C'est présupposer aussi+qu'il est au moins possible que Pierre ne soit plus là après 8h. (D'où l'impossibilité de: +*il est encore vieux, +il est encore grand, Le mur a été démoli: +il est encore démoli, +il est encore trop tard pour le dire, etc.*). (op. cit., p. 169)

という見解を述べているが、我々の見解とは多少異なる。R. MARTIN によれば、encore は、基準時点以後において〈ne plus P〉の可能性を「前提」としななければならない。我々の考えでは、〈ne plus P〉の可能性は、基準時点で認められる事態に関わるものであり、それより未来についての可能性は encore の機能の中には積極的に存在しないと思われる。例 [14] [15] を未来形におくと、

[16] *Il sera encore vieux.

[17] *Il sera encore tard.

という、やはり、非文を得ることになるが、この場合、基準時点 ($T_j > T_o$) より更に未来に、〈ne plus P〉の可能性を「前提」とするのは、直観的にも肯首しがたいのである。それよりも、基準時点以前 ($T_i =$ 例えば発話時点 T_o) において、〈ne plus P〉の可能性が成り立ち得ないと考える方が、結局のところ、基準時点が過去、現在、未来にあっても、encore を統一的に扱うことになるのではないだろうか。

以上の我々の仮説をより検討するためには、ここで toujours の《persis-

tance》の用法との競合の問題に触れざるを得ない。上に挙げた R. MARTIN の論考に対し、B. POTTIER が《il est encore là》と《Il est toujours là》の相違について質問を提出している (R. MARTIN, *op. cit.*, p. 179)。それに関し、R. MARTIN は、

	$m < m_0$	m_0	$m > m_0$
ENCORE	P	P	◇~P
TOUJOURS	P	P	《il est probable que P》

という回答をしている。encore と toujours の相違は、基準時点以後の P の可能性の「前提」構造に存するというわけである。確かに、文脈により encore と toujours の相違をあきらかにするのは困難であるが、次の例を見てみよう。

[18] Un accidenté grave sort du coma. Il demande :

—Est-ce que je suis arrivé au paradis?

—Non, lui dit sa femme qui est à son chevet.

Rassure-toi. Je suis toujours là.

(H. Nègre, *Dictionnaire des histoires drôles*, p. 205)

重傷を負った事故犠牲者が昏睡状態から脱し、妻にたづねました。

—俺は天国にたどりついたのか？

—いいえ、ちがうわ、と枕元の妻がいました。

安心してちょうだい。あたしは相変わらずここにいるわよ。

この例文の toujours を encore に換えると、俄然、不自然な解釈になる。《je suis encore là》と妻が言え、夫の予想、期待に反して妻がなおも夫のそばに感じられるからである。より詳しく見ると、妻は、例えば、夫がもうあんなやつ (=妻) の顔もみたくないと思っていることを認めていることになる。この笑話の笑話たる所以は、こうした夫の倦怠を無視し、無邪気に妻が片時も離れず夫の枕元にいるという、夫婦間のギャップにある。確かに toujours と encore の相違は sens duratif の場合ひじょうに微妙であるが、この例 [18] からも理解出来るように、encore に比べて、toujours は基準時点 (この場合は発話時) において、〈moi-ne plus être là〉という異質の領域を積極的に構造化していないものと思われる。《je suis toujours là》は、基準時点以前に 〈moi-être là〉が成立しているという意味では、encore と共通する。けれども、その事態が基準時点では、〈moi-être là〉か 〈moi-ne plus être là〉なのか、両方の可能性が想定されているのであろう。toujours では基準時点で

〈moi-être là〉が「相変わらず」認められるというわけである。R. MARTIN の考えるような、未来時における *il est probable que P* の「前提」を用いなくとも十分に *encore* と *toujours* の相違は解釈できる。否、この未来時の「前提」を援用しても、次の例、

[19] **Il est toujours vieux.*

の奇妙さを説明することは出来ないのではないだろうか。

我々の仮説を簡略的にまとめると、*encore* は異質の領域 (= *ne plus P*) を構造化し、言わば *altérité construite (forte)* —強い異質性—を有しているが、*toujours* は異質の領域 (= *ne plus P*) を構造化するには到っておらず、*altérité non construite (faible)* —弱い異質性—のみを有していると言える。いずれにせよ、この異質な要素は基準時点において同質化されるため、ほとんど相違がばやけてしまうのである。

ここで、転じて *sens duratif* を決定するもう一つの重要な要因である語彙的アスペクトについて検討しよう。例 [1] の *travailler* が *sens duratif* と解釈されるのは、先に述べたように、〈*toi-travailler*〉という一つの *occurrence* が問題となり、かつ事行自体に持続を保証する運動があると考えられるからであった。この一つの *occurrence* 内部で、〈*P*〉と〈*ne plus P*〉に分けられる性質の事行は、*sens duratif* と解釈されうる。例えば次の例文を見てみよう。

[20] *Tiens! tu lis encore les journaux?!*

あれ、まだ新聞をよんでいたの?!

[21] *Tu crois que cet appareil marche encore?*

この機械、まだ動くと思う?

[22] *Il est neuf heures. Et vous êtes encore au lit!*

九時だというのに、まだねているの!

[23] *Il est impossible de partir aujourd'hui. Ma voiture est encore en panne, depuis hier.*

今日出かけるのは無理だよ。自動車がきのうからまだ故障しているんだ。

例 [20] [21] は例 [1] と同様に「継続動詞」であり、〈*ne plus P*〉を構築しうる。例 [22] [23] は *être* + 状況補語で、状態動詞に準ずる扱いを受けるが、[22] の *être au lit* は 〈*ne plus être au lit (= être sorti du lit)*〉を構築できるし、[23] は 〈*ne plus être en panne (= être réparé)*〉を構築できる。しかし、

[24] (= [2]) Votes êtes *encore* en retard, mademoisell Berthier.

の例では, être en retard という状態に区切りをつけ ne plus être en retard とするのは意味的に困難なため, sens duratif の解釈はうけられない。この例は, 反復を表わすのである。また, 同じ状態動詞でも, いわば状態性が強く, <ne plus P> といった discontinuité を導入できないものは, sens duratif の解釈も, そして sens itératif の解釈もうけることができない。

[25] *Elle connaît *encore* son patron.

[26] *L'homme est *encore* mortel.

1.1.2 sens itératif

encore が反復を表わす場合について考察しよう。基本的に sens itératif の解釈をうけるためには, 事柄 P は discontinu なものとして扱わなければならない。その discontinuité がいかなる要因により保証されているのかをまず観察しよう。

[27] Tu viens *encore* ce soir? (J. I. FRANCKEL, 1981, p. 144より引用)
きょうまた来るかい。

[28] Il se trompe *encore*. (A. Borillo, *op. cit.*, p. 41)
彼はまたまちがえた。

[29] Olivier s'apprêtait à s'élancer *encore*.
オリヴィエは再び突進しようとしていた。

例 [27] [28] は現在形におかれており, sens duratif を表わす例 [1] などと同じであるが, 語彙的に運動量をもたず, 「状態移行」を表わすのみである。例 [29] も encore は語彙的に s'élancer に係っており, sens itératif が保証されている。

次に, 複合過去 (複・過), 単純過去 (単・過) と encore の組み合わせを見ると, 基本的に, sens itératif となる³⁾。

[30] Il a *encore* oublié son parapluie.
彼はまた傘を忘れちゃった。

[31] Il a *encore* raté son examen.
彼はまた試験に失敗した。

[32] Olivier relit *encore* la lettre de Laura.
オリヴィエは再びローラの手紙をよみ返した。

現在形では, 文脈により sens duratif とも sens itératif とも扱えられる場

或いは、正当化できないものなのであろうか。

我々の仮説を先に言うならば、sens itératif には、二種類あるものとする。即ち、

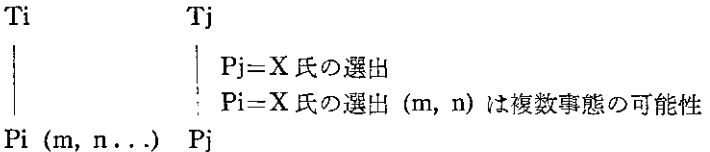
(1) sens duratif と同様に、〈ne plus P〉を構築する場合と (2) 〈ne plus P〉を構築しない場合である。換言すると、(1) では〈ne plus P〉が話者にとって解釈可能 interprétable なゾーンであり、(2) では解釈不可能 non-interprétable なゾーン、つまり、何もない vide の空間であると言える。具体例でこのことを論じよう。

[34] M. X. a encore été élu le maire du XVIII^e arrondissement.

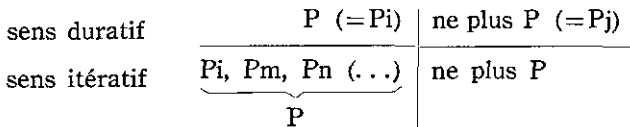
X氏は、再び18区の区長に選出された。

この例は、X氏の区長再選の事柄を描いている文であるが、この事柄描写の基準時点は発話時点である。sens itératif の解釈をうけるためには、当然のことながら、同一事態の一つ以上の occurrence の存在を認めなければならない。例 [34] で、encore により、X氏の選出は以前に少なくとも一度は実現していることが理解される。そして発話時点=事態成立の確認時点 (To=Tj) において、同様の事態が追加されたのである。この事情を図式すると、sens duratif とほぼ同様の図式が得られる。

sens itératif



sens duratif では Pi, Pj はまず同一事態の「異なったゾーン」として把握された。即ち、Pi を基準にして、Pj は〈ne plus Pi〉と規定されたのである。sens itératif の場合はどうであろうか。我々の考えでは、例 [34] において、Pj は、再選出以前に、〈ne plus P〉、即ち、X氏はもはや選出される可能性はないものと規定されている。sens itératif では、同一事態の内部に質的な差異を設けるのではなく、反復可能性の領域（これを P とする）を〈P〉と〈ne plus P〉に分けるのである。



この T_i において $\langle ne plus P \rangle$ と規定された領域が話者により (再) 解釈される時, *sens duratif* で問題となった「話者の期待, 予想」が付加されることになる。*sens itératif* で $\langle ne plus P \rangle$ が解釈可能の領域であるのは, 話者がそのように解釈した時であるから, 先に見た例 [33] のように *sens duratif* か *sens itératif* かそれ自体では決定できない例文は, 「もう故障しないと思っていたのに」といった意味合いを含むことが出来る。複・過の用法でも, A. BORILLO の言うところの単なる *ajout de quantité* (量的付加) ではなく, $\langle ne plus P \rangle$ を積極的に解釈する場合もある。先の例文 [30] [31] においても, それぞれ *oublier son parapluie*, *rater l'examen* という事態が前回で最後であるという認識があれば, 例 [33] と同様の含みをもつことになる。

sens itératif のもう一つの考え方は, 一般に行われている, 付加の考え方である。例 [32] が最も明瞭な例であるが, 以前に起こった事態が, 再び起こるということである。言い換えるならば, 同一事件の *classe d'occurrences* に, 一つ *occurrence* が追加されたといってもよい。この場合は, 先のような同一事態の反復可能性の領域は問題ではない。以前 (T_i) の事件 (P_i) に対し, 基準時点 T_j における事件は, 基本的に $P_i \neq P_j$, 即ち, P_j は P_i と異なるものとして規定されるが, 結局は同一事件の二つの *occurrences* として扱えなおされるのである。従って, ここでは, 「話者の予想, 期待」というような問題はおこらず, J. HÖPELMAN & C. ROHRER の解釈は正しいと言える。ここまでの我々の主張を次のようにまとめておく。

(1) *sens duratif*: 同一事態内部での $\langle ne plus P \rangle$ の構築
アスペクト的

(2) *sens itératif*: (a) 反復可能性の領域の構築。

(P itérable/P ne plus itérable)

(b) 同一事態の個々の *occurrence* ($P_i \neq P_j$) の構築。

(1) 及び (2) — (a) は, 「質的な異なり」 (*altérité*) を問題とし, (2) — (b) は「同質の別々の個体」 (*occurrences identifiables et distinguables*) を問題とする。(2) — (b) は次節で見る数量的用法に通じる。こうして見てくると, *encore* の時間的用法には共通の機能を見出すことが出来るように思われる。多少の重複をおそれずに言い表わせれば, *encore* の時間的用法は, 基準時点 (T_j) における事態 P_j のあり方を規定する。そのあり方の規定に共通点があるのである。即ち, (1) 基準時点以前の事態成立の確認時点 T_i の構築; (2) T_i における事態 P_i を基準として, P_j は, P_i とは「異なったもの」とアプリ

オりに規定する；そして、結局、 P_i, P_j は「同質のもの」と規定しなすのである。この(2)の「異なり」の点で、「質的異なり」か「個体の区別」が問題になり、用法が分かれるのである。窮極的に *encore* は、《*même*》を構築するのに《*autre*》を構築するものと言える。

2. 数量的用法

encore の数量的用法の検討に移ろう。数量化 (quantification) は、その前提として、数量化される領域が同質的でなくてはならない。例えば、*chien* は *un chien, des chiens* などと数量化できるが、*chien* と *singe* を一挙に数量化することは不可能である。*encore* の数量的用法においても、数量化の領域が何であるかを見わけることが重要な点であるが、基本的に三つのタイプに分けることができると思われる。

(1) 個別 occurrences の数(量)化。(不連続的)

[35] (= [4]) Elle participe, de son fauteuil, à la vie littéraire et écrit *encore* deux ouvrages.

(Colette, *La femme cachée*, p. 8)

彼女は、すわりきりのまま、作家生活をつづけ、更に二つの作品を書いた。

(2) 漸進、加減など連続的な運動の量化。

[36] Pierre a *encore* grossi.

ピエールは一段と太った。

[37] Si vous n'avez aucun grief contre moi, puis-je vous demander d'attendre *encore*? (Gide, *Les faux-monnayeurs*)

もしあなたが僕に対して何の不満もなければ、もう少し待っていただけないでしょうか。

(3) 状態、性質の強度化 (intensification)

[38] Elle est *encore* plus belle qu'autrefois.

彼女は以前にまして美しい。

[39] L'histoire naturelle, c'est *encore* plus ennuyeux que les affaires de cœur. (Gide, *Les faux-monnayeurs*)

博物誌なんて、心の問題より、もっと退屈なものだよ。

さて、例 [35] において、*encore* の存在は、(i) 基準時点以前に《彼女》が小説を何冊か書いており、(ii) 今、問題になっている二作品は「更に」付け

加えられたものであることを示している。先の時間的用法に準じて *encore* の機能を表わすならば、まず、基準時点以前 (T_i) において $\langle \text{elle-écrire X livres} \rangle$ という数量化が行われ、言わば、数量化領域 (*domaine de quantification*) を規定する。そして、その数量化領域を基準にして、基準時点 T_j では、数量化は問題とならないものと規定される。言い換えれば、 T_j は、数量化領域の外 (*extérieur*) に位置するのである。しかし、最終的に、 T_j では数量化がおこなわれる。ここで重要な点は、*encore* それ自体には数量化の機能がないうことである。例 [35] では *écrire DEUX livres* という数量詞が最も関与的である。*encore* は、数量化された事態の成立を (話者が) 確認することを表わしている。時間的用法と数量的用法のちがいは、*encore* の機能する領域のちがいとも言えるであろう。時間的用法では、事態成立の確認に関し *encore* が機能したのであるが、数量的用法では、事態の成立ではなく、成立した事態に係る数量化の確認が問題となる。このように考えてゆくと、*encore* は直接、事態の構築 (つまり事柄をまとめ描くこと) に関与する副詞ではなく、発話レベルにおいて、発話主体が事態 (或はその数量化) の成立を認める時点 (即ち T_i と T_j) を規定する点が一定していると言える。

数量化は (1) のタイプでは不連続的 (*discontinu*) であるが、(2) のタイプでは連続的 (*continu*) に扱われる。*grossir* や、その他 *augmenter*, *diminuer* など語彙レベルですでに量的概念の含まれているものの他に、例えば、事行の運動量の量化を表わすには、不連続の事行を隣接させて連続したもののように扱う場合もある。F. Nef の挙げる O. Ducrot の例がそれである。

[40] *Après que je suis parti, Paul a encore couru.*

(F. Nef, *op. cit.*, p. 101)

私の出発したあとに、ポールは更に走った。

(3) のタイプにおいて、*encore* が数量化に直接関わらないことが最もよく理解される。量副詞 *plus* (\sim que) により程度の差が明確に示されているからである。反対に、量副詞がなければ、*encore* だけで量的変化を表わすことはできない。例えば、

[41] *Paul est encore malade.*

は先に見たとおり $\langle \text{Paul-être malade} \rangle$ という事態の成立確認に関して〈まだ〉/〈また〉と認識する。決して、病状が悪化する (している) という読みはないのである。病状の程度を問題にするときは、

[42] *Paul est encore plus malade qu'autrefois.*

ポールは前にもまして病気である。

のようになる他ない。

どのタイプにせよ、*encore* は以前の状態に対して、〈今〉の状態が「異なっている」(同じ数量または程度が問題ではない)ものとして認識され、かつ、同様の数量化領域に属するものとして規定されるのである。従って以前と変わらない量が問題の時は、*encore* の数量的解釈はできなくなる。

[43] **Elle est encore aussi belle qu'autrefois.*

3. その他の用法

時間的用法、数量的用法は、或る一つの事態に関し、その成立、或いは数量化の領域を規定する用法であった。本節では、*encore* が文全体の内容に係る用法—*T. L. F.* が《*cheville logique*》と呼ぶ用法—について観察したいと思う。

3.1 制限的・対立的用法

用法の命名は便宜的なものである。例文を見てゆこう。

[44] *C'est un très bon musée. Encore est-il fermé pour cause de travaux.*
(ロワイヤル仏和辞典より引用)

これはとてもよい美術館だ、とは言っても工事のため閉館している。

この種の *encore* の特徴は文頭にたち、かつ主語倒置をひきおこすことである。文頭にたつのは文内容全体を *encore* の機能する対象とするためであろう。(主語倒置についてはここでは言及しない。) *encore* はこの例において二文間のつなぎの役目をしているように思われるが、そのことを詳しく検討する必要がある。例 [44] で前文 P_1 (*c'est un très bon musée*) と後文 P_2 (*il est fermé pour cause de travaux*) の間にはどのような関係があるのであろうか。*encore* は P_1 と P_2 をどのように結合しているのであろうか。例 [44] で重要な点は、前文 P_1 において美術館の良し悪しの叙述が問題なのではなく、良いという判断(断定)がなされていることである。*C'est un très bon musée.* というのは話者の断定の対象である。断定することの言語学的機能の理解は非常にむずかしい問題の一つであるが、ここでは、単に、*encore* は断定の内容について機能するのではなく、断定するという行為それ自体を問題にすると考えておく。例 [44] では、 P_1 (以前) を断定することにより、言わば、話者の断定の対象領域を設ける。*encore* は、 P_2 (以後) が断定の対象領域には属

さないもの（即ち、〈ne plus P〉と把える）とするが、結局は、 P_2 は話者の断定の対象領域として認めるのである。そこに一種のオリエンテーション（方向づけ）が生じ、 P_1 に比べ、 P_2 が制限的、対立的と解釈されると思われる。次の例は、制限的な場合である。

- [45] Je savais que ma demi-sœur avait trois fils; je ne connaissais que l'aîné, étudiant en médecine; *encore* n'avais-je fais qu l'entrevoir, car, atteint de tuberculose, il avait dû interrompre ses études et se soigner quelque part dans le Midi.

(Gide, *Les faux-monnayeurs*)

私は、腹違いの姉に3人の息子があるのを知っていた。私が知っているのは、医学生である長男だけである。とは言え、ほんのちよっとかいま見ただけのことである。彼は結核にかかり、そのために学業を中断し、南仏の何処かで静養しなければならなかったからである。

制限的というのは、 $P_1 = \langle \text{je connaissais l'aîné} \rangle$ に対し、 P_2 が内容的にもともと P_1 に関連しているために、「私が長兄を知っている」程度が狭められたと解することが出来るからである。Encore faut-il (inf./que—) が最少条件を表わすのも encore の断定の対象領域の構造化によるものである。

- [46] Alors, il suffit de copier? Sans doute. *Encore* faut-il savoir copier. Savoir copier, c'est savoir résumer, simplifier, choisir, accentuer.

(Faure, *Esprit formes*, p. 208 T. L. F. の引用例)

それじゃ、模写をしさえすればいいんですね。たしかにそうでしょう。とは言っても、模写をするには、少なくとも、模写のしかたを知らなければいけません。模写のしかたを知るということは、要約し、簡略し、選ぶべきものを選び、強調すべきところを強調するということです。

我々の考えでは、encore que P (P は接続法) の場合も基本的には encore の機能は一定している。

- [47] Auprès d'elle, Gontran bavarde volontiers, *encore* qu'il ne puisse parler avec elle de presque rien de ce qui lui tient à cœur.

(Gide, *Les faux-monnayeurs*)

彼女のそばで、ゴントランは自ら進んでおしゃべりをした。それにしても、彼の心の内側のことはほとんど話すことができなかったのである。

この例でも、やはり、encore は que 以下の文内容を断定の対象外とすることで、制限的な方向づけをおこなっているのである。

et encore! はどうであろうか。

[48] Il n'y a qu'un moment où ça devient intéressant... et encore.
(Gide, *Les faux-monnayeurs*)

おもしろくなるものは一瞬だけでしょうし、それもまたどうだかわからないね。

[49] (= [8]) Il y a eu une petite augmentation de salaire, et encore!
Cela n'a pas été sans mal. (D. F. C. より借用)
給料は少しだけあがったけど、それだって苦勞がなかったわけじゃないんだ。

P₁ et encore (P₂) の構文では、P₁ (と P₂) は、話者の断定対象の領域外の事柄の列挙なのである。事柄は、具体的に成立していようと、或はまた未来における可能事態にせよ、話者はそれらの事柄を認めない(従って例 [49]のごとく忿懣を表わす)、或は、疑わしいと把える(例 [48])というわけである。

F. NEF が *emploi pragmatique* (語用論的用法) と呼ぶ用法は、encore の規定する断定の対象領域が問題となる。T. L. F. ではこの種の encore は *tout bien réfléchi* の意味を表わすとしている。T. L. F. より一例を引用しよう。

[50] Une côte de bœuf n'est pas pour me déplaire. Tout de même c'est *encor* vous que je préfère. Et je le dis bien haut.
(Ponchon, *Muse cabaret*, 1920)

骨付の牛肉を出すのは私にいやな気持ちをださせるためじゃないんだ。とにかく私はやはりあなたの方を好むのだ。そのことは声を大きくして言おう。

この例の *c'est encor vous que je préfère* から、〈je-vous préfère〉という話者の断定が以前に成り立っていたことが理解される。encore はその以前の話者の断定が、基準となる発話時点で、〈ne plus P〉、即ち話者の断定はもはや有効ではないと把える。一度無効と把えた断言を再び有効と把えなおすところに、*tout bien réfléchi* のような解釈がなされるのである。

si encore+P (imparfait 或は plus-que-parfait) の用例は、si seulement+P (imparfait 或は plus-que-parfait) と近似し、*désir* (願望)、*regret* (後悔) を表わすとされる (cf. GREVISS, § 1036, Rem. 3, WARTBURG & ZUMTHOR, § 186 など)。具体的に、encore がどのようにこの意味の構築に

関わるのか、次の例文で検討しよう。

[51] Me voilà perdu. Si, *encore*, je l'avais fait exprès.

(Renard, *Journal*, 1897, p. 389)

僕の負けだ。わざと負けてやったのならまだしもなんだが。

[52] Si *encore* j'étais certain de préférer en moi le meilleur, je lui donnerais le pas sur le reste. (Gide, *Les faux-monnayeurs*)

もしせめて僕が自分の中の最良のものをより好むと確信できれば、それを残りのものよりも優先させるのだが。

例 [51] は過去における非現実の仮定であり、言わば、*regret* を表わす。例 [52] は現在に対しての非現実で、*désir* を表わす。この二例に共通していることは、ともに話者の評価が問題になっていることである。

例 [51] では、「僕がわざと負けてやったのなら」という仮定的な事柄が「まだまし」なものとして扱われている。「まだまし」ということは、ここでは、「僕が負けた」事実が話者にとって、言わば、許しがたい、マイナスの評価を下すべきものであるのに対し、もし「わざと負けた」のならば、それは、許しがたい、マイナス評価の事にはちがいないのであるが、それでも、多少はプラス評価としてみることも出来る、というほどの意味である。評価が問題になるのは、*encore* の機能とは無関係であり、Si+P (imparfait 或は plus-que-parfait) により規定されるものである。

[53] S'il fait beau demain, ...

[54] S'il faisait beau demain, ...

例 [53] は単に「明日晴天であれば」という仮定であるが、例 [54] では、話者の評価が問題となりうる（ただし常に評価モダリティがはたらくとは限らない）。

[55] Si on prenait un café...

[56] Si on prend un café,

例 [55] は勧誘の価値を持つが、勧誘とは、話者が良かれと思うことを相手にすすめることであるから、ここでも評価が関与している。それに対し例 [56] では、「コーヒーをのむ」という仮定的事実の存在のみを問題にする。

このように Si+P (imparfait/plus-que-parfait) で保証される話者の評価領域に関して、*encore* の機能が発揮されるものと思われる。*encore* はその基本的な機能として、基準時点以前にある対象に対し評価が下されていることを表わす。例 [51] の場合では、先行文脈の《me voilà perdu》に評価がなされ

ていると考えられる。ただし、仮定的な事柄がプラス評価をうけるのに対し、現実起こった事柄はマイナス評価となる⁹⁾。encoreはこのように基準時点以前でマイナス評価の対象領域が規定されているのである。すると、基準時点ではアプリアリに〈ne plus P〉、即ち、ここでは、もはやマイナスではない評価領域を認めるが、結局、マイナス評価の領域にとどまるのである。換言すれば、発話時点において話者は、現実の事態をマイナスに把えているのである。それに対し、非現実の仮定的事実はプラス評価のものとして把えられている。一方で、現実をマイナス評価の領域と規定しておき、他方で、現実ではマイナス評価の領域にとどまりながらも、(仮定的)にプラス評価の事柄を提出するというのが、Si encore+Pの構造である。この現実のマイナス評価と仮定世界のプラス評価の「葛藤」により、Si seulementと類似する評価⁹⁾、つまり、制限されたプラス評価が表わされるのではないかと、我々は考えている。

おわりに

encoreの多様な用法の観察を通じて帰納しうるのは、この副詞は常に事態に対する話者の「認め方」に関わっているということである。その「認め」が基準時点以前と基準時点の二時点において行われ、「認め」の領域を規定するのである。端的に言えば、すでに1.1の終わりでもとめたように、encoreは所与の領域Pに対して〈ne plus P〉というPとは「異なった」領域をたて、その次に、その「異なった」領域を先のPと「同じ」領域と認めるのである。A. BORILLOの立論では、同質の領域を認めるということが最も本質的であり、そこにajout de quantitéの考え方が生まれる。この考え方では、話者の事態に対する「認め方」は考慮されない。A. BORILLOにとってはencoreそれ自体の問題ではなく、文脈の問題だからである。我々の仮説は、A. BORILLOが明確に表わさない言語レベルを考慮に入れ、encoreは基本的に発話レベルの問題であることを主張する。

F. NEFの仮説では、encoreは常に以前に対象が存在するということを強調している。その意味では、我々と同様、encoreが本質的にadverbe de tempsであることを認めている。F. NEFはencore Xにおいて、Xよりも劣ったもの(inférieur à)、Xより以前のもの(antérieur à)が存在するというschéma d'implicatureを提唱するが、我々にとっては、それはimplicatureではない。「劣っているもの」(inférieur à)も「以前のもの」(antérieur à)も、二つの基準時点において操作の結果生ずる「価値」なのである。その操作こそ、我

々が *encore* の機能と呼ぶところのものであり、基本的に *ne plus* の解釈と構造化の問題なのである。*encore* は、その係る領域が、

(1) 一事態の成立、(2) 事態の数量化 (= 反復)、(3) 事態の構成要素に関わる数量化、(4) 話者の断言、(5) 話者の評価など多岐にわたる。その係る領域により *encore* による領域の構造化は様々に行われる。そのさまは上に論じたとおりでである。

encore の機能の特徴付けを求めることにより、我々は、日本語のマダとマタと対照させる地盤を用意したものと信じている。確かに *Il est encore là* と「彼、マダいるの」は対応しているように見える。*Tu as encore raté ton examen.* 「あなた、マタ試験に失敗したの」のマタも *encore* と対応する。しかし、マタは、「こいつはマタうまい」とか「あたして、マタ付き合いがいい方でしょ。だからいつも忙しいのね。」では *encore* の *itératif* とはかなり離れてしまうし、マダも、「もうお帰りですか。マダ五時なのに。」や、「入社してマダ三日目です。」のマダは、*encore* の *sens duratif* とはもはや対応することはない。マタとマダの考察をすることにより、我々は更に *encore* の機能をより正確に規定することになるであろう。しかし、それは次回の稿にゆづらざるを得ない。

〔注〕

- (1) 本稿執筆に際し、インフォーマント Pascal Yamak の氏に例文に関する細かいコメントをいただいた。ここであらためて感謝の意を表わしたい。
- (2) このように把えなおすのは話者の「認め方」の問題である。その意味では *encore* はモジュールな価値をもつと言える。
- (3) ただし、明確に *sens itératif* とは言えない例もある。例えば、後で検討する例 [41] や、次の Colette の例を参照。
«C'est le petit matin de Côte, les hirondelles qui suivaient la barque du jardinier, chargée de fruits et légumes dont l'odeur entrainait par notre croisée, à la Villa d'Este. . . Mon Dieu, prenez en pitié. . .» Il eut encore la force de rougir d'une prière commencée, (. . .) (Colette, *Aube*, p. 25)
- (4) F. NEF は、*encore* と *achèvement* の事行の組合せを観察している (Ibid, p. 101)。(例 *Paul franchit encore un sommet. Une bombe a encore explosé.*) この組合せでは *sens itératif* が表わされるが、*itération* の内容は細かく分類すると、単なる動作の反復や対象 (或いは主体) の数量変化をとまなうものなど様々である。ここでは観察のみにとどめておく。
- (5) マイナス評価になるというのは、観察事実であって、何故そうなるのかは、今のところ筆者には説明できない。

- (6) *si seulement* は日本語のバカリと似ている。(例えば、～ヲ願ウ/祈ルバカリダ) *si encore* はマダシモ/マダマシに通じるものがあるように思われる。*Si seulement* と *encore* の相違についてインフォーマントにたずねたところ、直観的に言って、*si encore* は常に現実にマイナスの事柄が(いくつも)あり、そのような状況でプラスの事柄を希求するのに対し *si seulement* では必ずしも現実がマイナスの事柄と直面していなくても構わないということである。この相違については稿をあらため、*seulement* の検討を行なう際に論じたいと思う。

[参考文献]

- BORILLO, A. (1984): "La négation et les modifieurs temporels: une fois de plus "encore"", in *Langue Française*, 62
- FRANCKEL, J.-J (1981): "Toujours", in *Bulletin de Linguistique Générale et Appliquée*, No. 8. Université de Franche-Comté
- GREVISSE, M. (1969): *Le Bon Usage* (9e éd.), Duculot
- MARTIN, R. (1980): "Déjà et encore: de la présupposition à l'aspect", in *La Notion d'Aspect*, eds. par DAVID, J & MARTIN, R., Université de Metz
- MULLER, C. (1975): "Remarques syntaxico-sémantiques sur certains adverbes de temps", in *Le Français Moderne*. T. 43, Vol. 1
- HÖPELMAN, J. & ROHRER, C. (1980): "Déjà et encore et les temps du passé en français", in *La Notion d'Aspect*, eds. par DAVID, J. & MARTIN, R, Université de Metz
- VET, C. (1980): *Temps, aspects et adverbes de temps en français contemporain, Essai de sémantique formelle*, Droz, Genève
- WARTBURG, W. & ZUMTHOR, P. (1973): *Précis de syntaxe du français contemporain* (3e éd.), Francke Berne